

# 西田幾多郎、『善の研究』へ

— 付論・その二 「ヴィタ・モルタリス」

## 山下善明

### はじめに

「西田幾多郎、『善の研究』へ」本論<sup>(1)</sup>は、西田の生涯を追想する因<sup>よす</sup>として彼の生まれ故郷石川県宇ノ気町を訪ねた紀行文（序章）、『善の研究』が成立して行く事実を訪ねた、これまた一種の紀行文（前章）、及び成立して行く思想を尋ねる試論（後章）から成る予定であったが、その〈後章〉の半ばで途切れてしまった。〈前章〉で見た成立の年代史でいえば、明治三十六年二月十五日の日記「……（北條）先生曰く、余はかくしてまう死するのみ、已に死し居れば。」<sup>(2)</sup>という記事の時点までに辿って途絶えたのであった。付論・その二である本稿は、この北條先生の言葉のもつ思想や論理ではなく、事実を——謂わば精神ではなく肉体をもう一度訪ねてみようとするものである。言葉は既に論理であり精神であるにしても。

西田幾多郎、『善の研究』へ 山下善明

### 一

西田の生れ故郷にある西田記念館の初代館長を勤めた上杉知行氏の著作に、『偉大なる教育者・北條時敬先生』<sup>(3)</sup>というのがある。これは、今日に到るまで、北條時敬についての唯一まとまった評伝である。北條時敬自身は、死後『廓堂片影』<sup>(4)</sup>として編纂された日記、書簡、学校での訓辞などを別にして、所謂公刊を目的としたものを何一つ書き残していない。従って筆者も、上杉氏の著作とこの『廓堂片影』の中の北條時敬以外、この人物に関して何も知るものをもっていない。いや、もう一つ北條時敬について書かれたものがある。それは、西田幾多郎が師北條時敬を語った二、三篇の回想的随筆である。筆者自身、北條時敬の名を知ったのは、言うまでもなく、西田のそれらの文章の中においてである。

そのうちの一篇、題名も『北條先生に始めて教えを受けた頃』<sup>(5)</sup>という一文は、もともと、北條時敬がその初代校長を勤めた広島高等師範学校の交友会雑誌『尚志』第一〇九号の附録として載せられたものである。発行は昭和四年十月。北條時敬死去約半年後、追悼の意を籠めた美しい文章である。

そういう文章であるから、それは要約されるべきものではない。だから、ここでも、中から幾つかの段を——いかにも北條時敬の面影を髣髴たらしめる段を抜き書きするにとどめたい。

「私が始めて先生に御目にかかったのは、私の十六、七の頃と思ふ。……先生に教えを受けたいと思つて、或人の紹介で、はじめて先生を御尋ねした。先生は玄関に出て来られて、今忙しいからと言ふので、蒟蒻版に擡つた数学の問題を渡され、これをやつて来いと言ふこ

とであつた。其頃、先生はまだ三十前であつたが、頭の禿げた喉仏の突出した人だと思つた。それから数日して、その問題を解いて持参したら、先生が逢つて話して下さつた。併しどうも沈黙な、話しにくい人で困つた。」

その始めての出会い、北條先生が石川専門学校の教師であつた頃であつたが、その専門学校が第四高等学校と改称されて、やがてその学生となつた西田が、書生として北條先生の家へ寄寓していた頃については、次のように書かれている。

「先生が私に自分の家へ来いと言はれるので、私は先生の御宅に御厄介になつた。先生はいつも学校から夕頃帰つて来られる。夜には、座敷で、先生のテーブルを真中に、左右に奥さんと私が机を並べて勉強する。遅くなると、先生が私にもう寝よと言われる。私は自分の室に歸つて床に就いても、私の癖で時々眠れないことがある。すると、十二時頃から先生の室で琴の音が聞こえはじめる。夜の更けるに従つて琴の音は益々冴えて来る。其中、私は寝てしまふ、遂にいつまで琴の音が続いたか知らない。」

そしてこの回想の文の終わり近くには、次のような一節を読むことができる。

「先生は測り知られない様な深い大きなものがあり、非常に厳格な様で、その奥に何処か非常に暖いもののある人であつた。併しその頃の私には先生は無口で、盤石にでも突き当たつた様で、話し苦い人であつた。いつかも、先生が黙つて居るから、此方も先生が何か言われるまで黙つて居ようと思つて、夜深くまで黙つて対座して居たことなどもあつた。」

以上のように抜き書きしただけでは点描にしかならないけれど、未

だ十七、八の高等学校の学生であつた頃の西田幾多郎と、その西田と十二歳を隔てて三十前後の北條先生との間で、師弟として対ひ合つていた姿は、歴々と目に浮かばすことができる。

しかし、金沢でのこの師弟関係はそう長くは続かなかつた。西田が高校二年の時に、北條先生は、一高の教壇に立つ傍ら母校東京大学の大学院に通うために、再び上京したからである。なるほど、その二年の後に西田も、四高を中途退学して上京し、東京大学の選科生となつた。しかし東京にやつて来た西田に向かつて北條先生は、「とうとう方向を誤つてしまつた。選科などは学業の遅れたものの入る所だ」と言つて叱つたことが、先の『北條先生に始めて教えを受けた頃』にも書かれてある。それでも西田は、入学試験を受けて正科生になる道をとらず、みじめな境遇の選科生として、「先生にも親しまれず、友人と言ふものもできなかつた。黙々として日々図書室に入り、独りで書を読み、独りで考えてゐた。」<sup>6)</sup>従つてこの三年間、西田は、同じ東京にありながら、北條先生との交わりも余りなかつたようである。少くとも、それを伝えるような資料は見出されない。

この両者が再び深い交わりの中に立つのは、「その頃……選科と言へば、あまり顧みられなかつたので、学校を出るや否や故郷に歸つた」西田が母校の四高の講師となつて、しかし一年も経ずしてそこを免職にされていたところへ、明治二十九年より山口高校の校長を勤めていた北條先生が、その西田を招んでその教務嘱託として任じた時からである。そして明治三十一年、北條先生が、今度は校長として再び四高に戻つた時、ほぼ時を同じくして西田も山口から金沢の高校に移ることになる。こうして明治三十五年までつまり先にも述べたように北條先生が新設の広島高等師範の初代学長として広島に赴くまで、両者

は、半ばなお師弟として、そして半ば同じ学校に奉職する同僚として、山口、金沢と、七年の歳月を共に過ごしたのである。西田自身は、北條先生が広島に去ったあとも、更に六年の間、四高の教授としてとどまるのであるが、ただその間、北條先生も、春、夏の長休みに、自分の生まれ故郷である金沢の町へ時に帰ることもあった。

広島へ移って翌年の三十六年二月にも北條先生は金沢へ帰省している。しかし二月といえば春休みにはまだ早すぎる。第一、創設一年にも満たぬ学校の責任者が、ゆっくり帰省するだけの長期の休暇などということができたであろうか。事実、おそらく文部省に向いたものであったろう、北條時敬のこの年の一月二十三日の日記にも「出京」という記事が見える。しかし、そうとすれば、二月のこの帰省を、東京から広島に戻る途次に金沢へ廻ったものと考えて、勘定が合うことになるだろうか。

いづれにしても、二月の半ばに北條先生が金沢にあったことは、西田の日記の二月十五日日曜日の次の記事内容から明らかである。

「……夜三竹君と北條先生を訪ひ、久しぶりにて快談。先生、トルストイのモッパスサンを送らる。先生曰く、余はかくしてもう死するのみ、已に死し居れば。三竹君曰く、余は随分苦しき所を忍びたり。」

## 二

西田と三竹に向かって北條先生曰くのこの言葉は一体何であったのだろうか。まず単純に想像できることは、北條先生は一月下旬の在京中に何か篤い病を得て、金沢へ帰りそこで療養の日を過ごしていたのではないか、ということである。しかも、それは単に回癒を待つ日で

はなく、結果として誤診であったにせよ——というのも北條時敬は広島高等師範の校長職のちも、東北帝大校長、学習院長と教育者、教育行政家として堂々の道を歩んでいるのであるから——死を待つしかない病を宣せられていたのではなかったか。事実、西田の四月二日の日記には、「北條先生を停車場に見送る。」とあって、これは広島へ帰る北條先生の見送りに相異なく、とすれば北條時敬は、既に述べたように創設一年目の学校の校長という重責にあったにもかかわらず、二ヶ月もその職務を離れていたことになり、これは病氣療養以外の理由では考えられないように思われる。

だが、北條時敬がこの時期そのような大病を喫したという記事は、少なくとも上杉氏の北條伝には見当たらない。とすれば、金沢でのこの二ヶ月にも及ぶ長期滞在そのものは別の理由があつて、偶々西田らが訪れた二月中旬頃に、伝記にも記すに及ばぬ些細な病で臥つていた北條先生は、一方で非常に繊細な心の持主でもあった故に、僅かな患いにも早くも鋭敏に死を感じ取っていて、「余はかくしてもう死するのみ」という言葉を発したのであるだろうか。

しかし、北條時敬が本当に死の病にある肉体においてすらも繊細さよりも豪毅さの方が立ち卓る精神の人であったことは、上杉氏の北條伝が伝える次の一節を読むだけで明らかである。すなわち、昭和四年、北條時敬が七十一歳で亡くなる年の二月、既に回復のない病であることを覚悟して入院していたベッドの上で一時重病に陥った時、ほとんど付き切りで看護に当たっていた甥の時三郎が、苦しそうな様子を見かねて、

「叔父さん、苦しいでしょう」と声を掛けると、につこり首肯い

「時三郎、俺は死にはせんぞ、ありがとう」と答えたと言われている。<sup>(8)</sup>

いや、西田の回想の文からもう一つの逸話を引いておいてよいだろう。

「先生はその頃ベース・ボールに熱中せられた。毎日学校が終つて夕方まで、先生のグラウンドに立つて居られないことはない。先生はいつも捕手の様であつた。或時、先生が相変わらず捕手をして居られて、M君が打つ時、急に飛び出られたため、左の顚顚を打たれた。先生は痙攣を起こして倒れた。全く言語が出ず、殆ど人事不省の様であつた。人々は驚いて先生を病院へ担ぎ入れた。医者は今夜の中に熱が出ればもうだめだと言ふので、皆が心配した。幸に熱も出ず回復せられた。私が翌日病院へ見舞いに行つたら、先生は小さな声で唯一言、M君に気にしない様に言つてくれと言われた」<sup>(9)</sup>そして、それはまた「その奥に何処か非常に暖かいもののある人であつた」ことを語るものでもあろう。

西田も、「先生は元来心身共に強健な人であつた。私は先生は九十まで生きられるであらうと思つていた」<sup>(10)</sup>と書いている北條時敬——その未だ四十代の旺盛な時のあの言葉の背後に、何か死に通ずる病気の震えを想定しても、それは徒らな忖度にすぎないであらう。果たしてそのような推測は「死」の文字について誘われた無意味な廻り道でしかなかった。西田のその日の日記を読み直してみると、「夜三竹居と北條先生を訪ひ、久しぶりにて快談」となっているのである。まさか、病床に見舞つて、如何なる意味であらうと快談などというものはありえないことである。

しかしながら、あの重き言葉が、快談の中で一時現われて直ぐ消え

て言った言葉とも到底思えない。「久しぶり」が談を快くさせたとしても、それは北條先生の久しぶりの帰省に、積もる四方山話で花を咲かせたということではなかったであらうからである。既に西田の回想の中から引用したように、かつてある日は、既に深く禅の修養をしていた寡黙の北條時敬も北條時敬なら、西田も西田、夜更けまでお互い一語も発さず対ひ合つて座つていたことさえあつたのである。気安い談話などして時を過ごす二人ではとてもなかった。一方はベース・ボールに、一方はテニス・ボールに夢中になることはあつても。実際、先生は、「余はかくしてもう死するのみ」と言い、もう一人の同席者三竹も、苦しき所を忍んでいると、呻き声のような言葉を発しているのである。とりとめもない談笑で過ごした一夕などではなかったことは間違いない。

むしろ、何よりも西田自身の方で、西田の後年（大正四年、西田五十五歳）の歌をもつて言えば、

人は皆幸ありげなり

この思ひ誰と語らむ物足らぬ世や  
という寥々の日々を——特に北條先生が広島に去つてこの一年ほど過ぎたいたとすれば、正に久しぶりに「この思ひ語らむ」に、今、最も敬愛する先生と言葉を交しあえて、それが西田にとつての「快談」というものの意味ではなかったらうか。そうであつたればこそ、西田は鷗外日記のように毎日常素つ気ない記事の中に、北條先生の言葉を書き留めもしたのである。かくて、「この思ひ誰と語らむ」という西田のその思いに呼応した先生の言葉であつたとすれば、その言葉を受け取めた西田の方からこそ、この言葉を理解する道が拓かれるのでなければならぬということにならうか。だが、この言葉の余波というべ

きものすら、その後の日記には見出されない。ただ、むしろその日記を遡れば、この年の年頭の感として、次のような記事を読むことができる。

「人間は死んで居るものと思わなければ大事がなせぬと河井もゴルドンも言はれた。自分は三十五年十二月三十一日に死んだものと思ふて見ても、どうも本気にそうは思へない。併し故人も万事を放下せよと曰はれたが、どうしても死んだものと思ひ万事を放下せねば純一になれぬ。」

### 三

それでは、北條先生の言葉に迫るせめて外面的な手掛かりとして何があるのだろうか。あの日の記事を読み直すならば、やはりすぐに目につくのは、「先生トルストイのモッパスサンを送らる」という一行である。このモッパスサン論というのは、おそらく『モッパスサン作品集への序』という一文であるであろう。序文といっても、作品集へのほんの二、三ページの推薦の辞といった類いのものではない。二段組小文字の河出版『トルストイ全集』で、十八ページ、普通の版型なら五十ページはある長文の、モッパスサンに関する優に一箇の作家論である。<sup>(11)</sup>この冊子が北條先生から贈られた理由については、日記には何も書かれてはいないが、この作家論があつた夕べの話題に載つたとすれば、何か北條先生の言葉に結がるようなことが、このトルストイの一篇に書かれてあるのかも知れない。しかし、そのような予想を抱いて再読しても、せいぜい次のような箇所が見出されるにすぎない。モッパスサンの「人生の悲惨」を取えて代弁してトルストイが語るその一節を要約して書き写してみるならば――

若い女とその肉体への愛、この美は果たして確かに美なのだろうか。もし人生の時を押しとどめておくことができるものなら、それでいいのかも知れない。だが人生は過ぎて行くのだ。が、一体、人生が過ぎて行くとはどういうことなのだろう。それは、老いの醜さが隠しようにもなく現われてくることなのだ。自分がかつて仕えた美は、一体どこにあるのだろう。あれこそ、すべてだったのに。あれがなければ、何もない。人生もないのだ。だが、そこにこそあると思われていたところに、もはやその人生がないばかりではない。自分自身が人生から去り始め、衰えかけ、崩れかけて行く一方で、かつて人生のすべての幸福だった愉悅を、他の者達が目の前で自分から奪い取って行くのだ。そのようなところに、人生の何か別の可能性がちらつき始める。決して侵されることのない、真実で常に美しい何か別の或るものが。だがそんなものが本当にはあるはずがない。そんなものはあるべくもなく、すべてが砂ばかりだと知った時、その別の或るものは、我々を苛立たせるオアシスの一片の幻影にすぎなくなってしまうのだ。――

プラトンの『パイドロス』で語られる美のアイデアも、一瞬間間見られてすぐに幻影と消えて行くここでは、老いとその悲惨な人生が語られても、死は語られない。かりに語られるにしても、それは、零れ落ちる「砂」としか語られなかったであろう。そのような、老いの終りに生が「崩れ」去る死と、北條先生の言う「已に死しおる生」、従つて生より先にある死とは、いかなる結がりの付けようもなく遠く隔たっていると言わねばならない。

とすれば、西田の日記のなかで、北條先生の言は、その前の「トルストイのモッパスサンを送らる」を受けているというよりも、後に

続く「三竹君曰く、余は随分苦しき所を忍びたり。」と絡がつていると見るべきであろうか。ここに出て来る三竹とは、三竹欽五郎と言つて、元山口高校の教師であつたが、西田と同じように、北條時敬が山口から金沢に移るに従つて四高に赴任し、北條時敬のもと既に数年に亘る西田の同僚であつた。幸いに西田のある記念の文章に、三竹の為人を伝えている次のような箇所がある。

「彼は一介のドイツ語の先生であつた。併し深く禅を修め、剽軽の様に真実人の為に憂へ、潔癖にして曲れることを嫉み、狷介の風があつたが、又物事に拘泥しない所があり、面白い一種の人物であつた。重んぜない人もあつたらうが、私には今に忘れ難い人の一人である。」

この回想の中に自ずから浮かび上がる三竹の顔立ちは、しかし、明治三十五年八月七日の日記のなかで既に一筆のもとに描かれている。

「此朝三竹君透過せりとて威張りて帰る。」

因みに、西田自身の無字の公案透過はそれから丁度一年後、つまり、北條先生のあの言葉から半年後の、明治三十六年八月三日のことである。しかし、いづれにしても、三竹に関してはそれ以上のことは分かる手立てもなく、まして三十六年二月頃に、既に透過して半年を経た三竹の身に、忍ぶほかはない如何なる苦しいことがあつたのか、知る術もない。ただ西田のあの日の日記のなかで、三竹の言葉と北條先生の言葉の間に相応するものがあるとすれば、北條先生の言葉の蔭にも、その時の北條先生自身の身の、何か忍ぶ他ない不幸が隠されていると見ることはできるのであるまいか。

#### 四

上杉氏の北條伝によれば、この明治三十六年、「四女潔子<sup>きよこ</sup>さんが誕生した。だがこの世に生をうけて間もなく幼くして死別しなければならなかつた。」<sup>(13)</sup>だがこの四女の誕生とその間もない死が三十六年のいつのことであつたか、それ以上の精しくは、筆者にも調べる手立てはない。しかし、もしそれが三十六年の初めの頃であつたとすれば、どうなるであろうか。既に述べた一月二十三日の東京出向と、続く二月からの数十日間の金沢滞在は、——それは寄り道としては長過ぎて——必ずしも結び付くものでなければ、一旦東京から戻つてのち広島から真直ぐの——つまり新任地の広島に北條家の墓があるはずもなく、故郷金沢の代々の墓に葬るべく四子潔子の小さな遺骨を胸に抱いての帰省ではなかつたらうか。そうして、金沢滞在二ヶ月の長さは、その傷心慰むの長さではなかつたらうか。いや、西田の三月四日の日記に「(我が屋に)北條令室来訪」とあることから判るように、それは夫人を伴つての帰省であつたが、北條時敬には、妻薛の傷心をこそ労る二ヶ月間の帰省であつたらう。なぜなら、漱石『道草』の主人公健三の妻の胸に、「新しく生きたものを拵え上げた自分は、其償ひとして衰へて行かなければならない」という感じが微かに湧いたように——しかもそればかりでなく、その衰えに追い打ちをかけるような赤子の死であつたからである。そして父親たる夫には、たとえ新しい生命の償いとしての衰えは妻ほどにはないとしても、それだけ一層、吾子の死と共に己れの死がなければならなかつたであらう。それは、「かくしてまう死するのみ」と言われたように、何らかの前提からの追認的な結論ではなく、ただ端的に「かくして」という他はない死であつた。少なくとも西田は、北條先生の曰くをただ「かくして」と記すの

みであつた。ここに、死という絶対不死の「形なきものの形を見、声なきものの声を聞」かんとする我々の心に哲学的根拠を与えたいとする一哲学者の誕生があつたと言へば、それは余りに強引過ぎる線を引いたことになるだろうか。

## 五

もちろん、この誕生から、西田哲学として確立される「場所の論理」までの真直ぐの道が通じているわけではない。おそらく曲折の道であろうそれを、ここで辿ろうとするのではない。「はじめに」で述べたように、本稿はもとより、北條時敬の言葉の、西田哲学へと向かう思想的意味を求めることを目的としていない。むしろ、北條時敬という一人の潔い実践家——たとえば彼が広島高等師範を去る時、その送別会の挨拶に、「自分がこの学校で行なつたことに、もし何ほどか功績があつたとすれば、その半面には、またそれだけの罪を犯していると思つて、自分を恐れている。」<sup>(5)</sup>と語つた言葉は、その実践の潔さを証しているのであつて、反証しているのではない。——の、生と死の澄明な自覚を、愛弟によって書き留められたその一言のうちに見ることができれば、それで足りる。

だが、それは北條時敬の一つの深き覚悟を語るものであつて、そこに西田にも深く感ずるものがあつたとして、しかしその西田にもう一つの思いはなかつたであらうか。というのは、この時、西田にもまた、生まれてまだ数カ月にもならぬ幽子なる女兒があつたからである。

しかしその数年の後、北條先生がもつたと同じ運命が待っているとは、西田はその時、知る由もなかつた。つまり、それから五年の後、

明治四十年一月、奇しくもあの夕べに席を同じくした三竹の命名<sup>(16)</sup>なる幽子——その名前に曳かれて行つたかのように、この二女の短い命は終わるのである。そして父幾多郎が、「何か記念を残したい。せめて我一生だけは思い出してやりたい」という一心で筆を執つたのが、今は東京にある友藤岡東圃の著『国文学史講話』に寄せた序の一文である。<sup>(17)</sup> その中から二つのとりわけ美しく哀切な箇所を抜き書きしておく。

「余は今度我子の果敢なき死といふことによりて、多大の教訓を得た。名利を思うて煩惱絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられた様な心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日の様な清く暖かき光が照らして、凡ての人の上に純潔なる愛を感じることが出来た。特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりして居た者が、忽ち消えて壺中の白骨となると言ふのは、如何なる訳であらうか。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない、此処には深き意味がなくてはならぬ。」

そしてこの想い出の記の終り近く——

「一方より見れば、生まれて何等の人生の罪惡にも汚れず、何等の人生の悲哀をも知らず、唯日々嬉戯して、最後に父母の膝を枕として死んでいつたと思へば、非常に美しい感じがする。花束を散らした様な詩的一生であつたとも思われる。たとへ多くの人に記憶され、惜しまれずとも、懐かしかった親が心に刻める深く記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は寂しき死を慰め得て余りあるとも思ふ。」

あるいは、「死にし子、顔よかりき、をんな子のためには、親、をさなくなりぬべし」と、この哀惜の傍<sup>そば</sup>をそつと通りすぎるのがいいの

かも知れない。だが、これら二つの数行にこそ、北條時敬のあの言葉の、少なくともそれを聞いて西田が受け取めた謂わば体験の意味が明らかになっていくのではないか。つまり、北條先生のあの言葉から数年の後に。

親が綴って逆に亡児の形見になっているとさえ思われるこの記には、子を喪くした親の単なる哀別としては決して書かれないであろう言葉が、少なくとも二つある。一つは、「心の奥より秋の日の様な清く温かき光が照らして」であり、今一つは、「悲哀は寂しき死をも慰めて余りある」という言葉である。死をも慰めるものがあるとすれば、それは生死を超えたものでなければならぬ。だが、生死を超えて寂しさを慰めるものは、歎び、従って生の歎びではありえない。ならば、それは、生死を超えた死でなければならぬ。生死を超えた死なる悲哀でなければならぬ。有無を超えた絶対無の大悲でなければならぬ。生死にさざめく心の、さらにその奥から照らし出る光は、生の春の日の光ではなく、死の秋の日の光である。その光の中へ、已に死しをれば、かくしてこの生がもう死するばかりであることに何の不合理があろう。明治三十六年二月十五日の夕べのあの言葉は、間違はなく、生と死のこの上なく澄み渡った自覚を語る一語である。

## 六

生死を超えた、ヨーロッパの近代哲学の言葉で言えばトランスツェンデンタルな死、いや、むしろシスツェンデンタルなと言うべき生死に先立つ死——その悲哀は、当然のことながら、漸く処女作の『善の研究』を書き了えつつある、従って未だ無名の一哲学者が亡き児を偲んで、その胸を暫くの間涵して消えた悲哀ではない。既に「付

論・一」でも引いたように、「場所の論理」の成立の時にも西田は、「生けとし生けるものの底には死があり、悲哀がある」と語り、そして最晩年の最後の著作の中でも、こう書かれてある。

「人生の悲哀、その自己矛盾と言ふことは、古来言旧された常套語である。併し多くの人は深く此の事実を見詰めていない。」その悲哀、その自己矛盾の事実はどこにあるのか。そして、その「深き意味」は、「根本的な自己矛盾の事実は、死の自覚にある」と西田は言う。

つまり、その事実は客観的に見る一事実ではないのである。それにもかかわらず客観的な一事実として見るならば、その限りで私達は「深く此の事実を見つめて居ない」のである。その時、自身の死も、私達の知っているのは自分という一生物の終りとしての死であるにすぎない。「生物は死んで行く、死なき所に生命はない。そこにも既に自己矛盾があると言ひ得る。併し生物は自己の死を知らない。自己自身の死を知らないものは、……死と言ふものはない、生物には死がないとも言ふことができる。」要すれば、私達は、自己の死を知らない生物としての自己の死を知っているだけである。自己の死のかかる知の故に、自己の死を知らないという無知は、私達にあっては、単に無知であるよりは一つの忘却であろう。かかる忘却から覚めて死の自覚であるとしても、それはしかし、正にその故に、無知を知に更えることにはならない。むしろそこで、知の無知という自己矛盾が初めて重き「自己矛盾の事実」となる。事実即意味の「深き意味」となる。

だが、死のない生物としての死があるだけの私達である時、私達は一切何を忘れてこの世界の中に生きているのか。「我々の自己が世界の中にあることが忘れられて居る。」その忘却のなかで、時はただ一方的に飛去するのみである。しかし、この世界にあって、この地上に



あつて、ただ過ぎ行くことを、ただ老ゆることを嘆くに及ばない。この地上に生きて、他のどこもなく、ということが、既に死して生きていることであり、既に死しおれば、時とはどまるからである。「時とはどまる」と言つたのは、「純粹理性批判」<sup>さなか</sup>最中のカントであつたが、「それでも地球はとまっている」と言つたのは、それから百五十年の後、晩年のフッサールであつたろうか。地球がとまっていればこそ、この地上に、「あれこそすべてだつた、自分がかつて仕えた美」もあつたのである。そしてその向こうに、いやその最中に、決して「苛立たしい一片の幻想」ではない美のアイデアが。

私達は、自分が世界の中にあることを再び想い出すならば、死は、自らのそれさえ生物の終りとしてただ自分の前方の、見えないところに見る死ではなくなるだろう。つまり、見なければ見ないで済む死というものではなくなるであろう。それはむしろ、いつも生のすぐ背後にあつて、しかも振り反つて見ることでできない死、つまり知の無知が知の知とはなり得ず、そのままに自己矛盾の重き事実となつた死となるであろう。そのように想い出された生こそ、「已に死し居る生」<sup>ゲイッ・モルタリス</sup>に他ならないのである。

★ ★ ★

この、生のすぐ背後にあつて、しかも振り反つて見ることでできない死を鮮やかな筆致をもつて語つた文章を、私達は幸いに私達自身の古典文芸の中にもつてゐる。それは、兼好の『徒然草』の中の一節である。この全三四三段の『徒然草』が、第三十段辺りを境にして、浄土宗的な詠嘆的無常感から、禪宗的な自覺的無常観に移つてゐること

は、人のよく知るところであるが、その第一五五段の後半は次のように綴られている。

「春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣をもよほし夏よりすでに秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、……待ちとるついで甚だはやし。生、老、病、死の移り来る事、またこれに過ぎたり。四季はなほ定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも来たらず。かねてうしろに迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来たる。沖の干渴遙かなれども、磯より潮の満つるがごとし。」

唐木順三の語を借りて言えば、まことに人生の透し絵の觀察者兼好らしい筆という他はない。——「余はかくしてまう死するのみ、已に死し居れば」。この言葉もまた他方で、囀基と謡曲の大趣味人であつた北條時敬の、他所ながら見た生死の眞実であつたと読んで、しかし聊かもその體驗的意味を減ずるものではないと思われる。

(一般教育 助教授 ドイツ哲学)

— 注 —

- (1) 明星大学人文学部紀要第二四号三三四六頁
- (2) 付論・その一「明るき世界」は同紀要 第二八号一一二頁
- (3) 昭和五三年、北国出版社
- (4) 昭和六年、教育研究会
- (5) 『西田幾多郎全集』昭和四一年、岩波書店 第二巻
- (6) 同巻「明治二十四五年頃の東京文科大学選科」
- (7) 同書
- (8) 『北條時敬先生』一五八頁
- (9) 『北條先生に始めて教を受けた頃』
- (10) 同書
- (11) 『トルストイ全集』昭和五四年 第一七巻 一二六—一二四三頁

- (12) 『西田幾多郎全集』第一三卷『三々塾四十周年に当りて』
- (13) 『北條時敬先生』八七頁
- (14) 『道草』第八章
- (15) 『北條時敬先生』八八頁
- (16) 明治四〇年一月一四日付堀維孝宛書簡参照
- (17) 『西田幾多郎全集』第一卷『国文史講話』の序「東圃自身「今度出版すべき文学史をば亡児の記念としたいとのこと、及び余にも何か書き添えてくれよといふこと」で、西田はこの序文を記した。
- (18) 『西田幾多郎全集』第一卷『場所的論理と宗教的世界観』二九三頁
- (19) 同書三九四頁
- (20) 同書四〇八頁
- (21) 同巻『生命』三七〇頁
- (22) 西田哲学に深き理解をもつ精神病理学者木村敏氏が、自らが治療に当たっていた一人の若い女性の自殺を機として書き始め、そして殆ど詩にまで高まっている論考『メント・モリ』に、次のような一節を読むことができる。ヘラクレイトスの断片七七番も語るように、「われわれが自己自身の生を生きるということには、同時に、死を生きるという意味がなくてはならない。死を生きるということは、生とも死とも言えない死が、われわれの個体的生命の場所において生の相をとって現成しているということである。」（『分裂病の現象学』平成三年、弘文堂、三五三頁）そして「生は、死が時満ちて死そのものの相において現成するまでの期間、生の姿をとって現われ出ているという事実にはかならない。」（同書、三五四頁）
- (23) 『唐木順三全集』昭和五六年、筑摩書房、第五巻『中世の文学』八八頁参照